2026/11/8

『この土の器をも』（Ⅱコリント 4：1〜7・7）

【開会聖句】

4:7 私たちは、この宝を土の器の中に入れています。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

＜序論＞

・「Ⅱコリント」は、パウロが、紀元 55〜56 年頃、マケドニアで書いた手紙と考えられています。宛先はもちろんコリント教会ですが、第一の手紙から、それほど時間が経たないうちに、恐らく一年以内に書かれたようです。パウロは、エペソで第一の手紙を書き、またテモテを遣わしましたが、コリント教会には依然として多くの問題は残されたままでした。そこでパウロは、エペソから海を渡ってコリントを短期間訪問し（Ⅱコリ 12:14）、その後、今では失われてしまった一通の手紙（幻の手紙）を涙ながらに書いて（同 2:4）、テトスに届けさせたのです。今朝の「Ⅱコリント」は、その後、しばらくして書かれた手紙のようですが、この手紙には他のパウロの手紙には見られない特徴的なことがあります。その一つは、パウロが、自分自身のことについて多く語っているということ。もう一つは、喜んだり、悲しんだり、怒ってみたり、少々、感情の起伏が激しいように思える箇所があるということです。それは、当時のコリント教会内にパウロが使徒であることに対して強い疑いを抱く人たち（反パウロ派）がいたという事情があったからだろうと考えられています。パウロは、そのような人たちに対して自分の使徒職の正当性を述べるわけですが、その中で、どうしても自伝的なことにまで触れる必要があったり、時には、少し感情的で過激とも思えるようなことばが飛び出したのではないかと思われます。ただ、それゆえに、この手紙にはパウロの個性や感情というものが非常によく表れており、彼の神学の核心とも言えるようなことばも数多くちりばめられています。

＜本論＞

1. 文字は殺し、御霊は生かす

　ということで、今朝の 1〜3 節でも、パウロは自らの使徒職の正当性を訴えます。その 3 節に『覆い』とありましたが、それは何を意味しているのでしょうか？直前の 3 章の最後の部分を読むとよく分かります。3 章 13 節からお読みします。

　『モーセのようなことはしません。彼は、消え去るものの最後をイスラエルの子らに見せないように、自分の顔に覆いを掛けました。しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるも

のだからです。確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いが掛かっています。しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです』(Ⅱコリ 3:13～17)。

少し前の 3 章 6 節には、『文字は殺し、御霊は生かすからです』とありますが、「文字」或いは「覆い」とは、旧約の律法のこと。そして、人間は律法を完全に行うことはできないという、人間の罪を意味していると言えるでしょう。それは、神に頼ろうとせず、自らの力で神に近づこうとする姿勢のことでもあります。パウロも、以前はそのような人でした。パリサイ人の中のパリサイ人。旧約の律法を誰よりも厳格に守ることで自らの義さを示そうとした人でした。けれども、あのダマスコ途上で復活のキリストが現れてくださり、彼はその間違いに気づいて、180 度、変えられたのです。その時、彼の目から鱗のような物が落ちて、目が見えるようになった、と「使徒」9 章にはありますが、「鱗」と「覆い」には何か共通するものを感じます。

2. キリストを宣べ伝える

そして 5 節では、そんなパウロが、使徒として、そして伝道者として大切にしてきた姿勢と言うか、生き方が語られます。4 章 5 節。

『私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです』(Ⅱコリ 4:5)。

3 章の始めでも、彼は次のように言っています。

『私たちは、またもや自分を推薦しようとしているのでしょうか。それとも、ある人々のように、あなたがたに宛てた推薦状とか、あなたがたからの推薦状とかが、私たちに必要なのでしょうか。私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心に書き記されていて、すべての人に知られ、また読まれています』(同 3:1～2)。

パウロのような当時の巡回教師（伝道者）の中には、「推薦状」を持ち歩いて、その権威を誇示しながら伝道するような人たちもいましたが、パウロは、私たちには、そんな「推薦状」など、一切必要ない。コリント教会の人々の姿こそが、私たちの働きを証明する生きた推薦状だと言っているのです。そのように彼が言い得た理由が、先程、お読みした 4 章 5 節だと思います。

ここでパウロは「主なるイエス・キリストについて宣べ伝えています」とは言っていません。「主なるイエス・キリストを宣べ伝えています」と言っています。「イエス・キリストについて宣べ伝える」とは、キリストについての、或いは、キリスト教についての知識を語ることです。長く教会生活を送っていれば、それはそんなに難しいことではないでしょう。しかし、「イエス・キリストを宣べ伝える」とは、もっとストレ

ートなことです。単なる知識としてキリストを語るのではなく、自らのうちに確かに生きておられるキリストを自らの身をもって証しするということだと思います。私たちは、時々、「イエス・キリストは私のうちに生きておられる（内住）」と言ったり、祈ったりしますが、それはなにか神秘的な体験のようなことではなく、イエス様がご支配する（治める）自分になるということです。先週のメッセージで、私たちクリスチャンは、どんな立場や役割の違いがあっても、すべてキリストの「しもべ」だとお話ししましたが、神への恐れからでなく、心から愛するがゆえに、自分の主人であるイエス様のみことばに従ってゆこうとするのが、あるべき「しもべ」の姿でしょう。今朝のパウロも言っています。『私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです』（同 4:5ｂ）と。

3. キリストの光

そして、6 節。

『「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです』（Ⅱコリ 4:6）。

「闇の中から光が輝き出よ」とは、「創世記」1 章 3 節にあるみことばですが、神が天地創造の業において最初に発せられたことばです。しかし、パウロがここで言いたかったことは、言わば「第二の創造」とも言える神の業です。それは、キリストの光が、神の栄光を知る知識を輝かせるために。つまり、私たちの心の目を開き、神の真理を悟らせるために、私たちの心を照らしてくださった、ということです。

＜結論＞

そして、今朝の開会聖句の 7 節。

『私たちは、この宝を土の器の中に入れています。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです』（Ⅱコリ 4:7）。

私たちは、とかくこの土の器の方を問題にします。自分の土の器、人の土の器、とても気になります。これを身体・肉体と取ることもできますし、置かれている環境、或いは、人生と取ることもできるでしょう。そして、時に優越感に浸ったり、時には自己嫌悪に陥ったり、人と自分を比較して一喜一憂したりします。けれども、パウロが言うように、本当に大切なのは器ではなくて、その中身なんです。

今朝のタイトル「この土の器をも」は、あの三浦綾子さんの小説のタイトルでもありますが、三浦綾子さんの人生は失意と病の人生でした。戦争に翻弄され、長く苦しい闘病生活を強いられ。しかし、彼女は、自分みたいな不幸な人生はないと、自分の器を嘆き悲しむ人生から、こんな土の器の中にも宝であるキリストがおられるんだという、キリストの光を輝かせる人生へと変えられたんです。たとえ自分の土の器が欠けだらけで値打ちがなかったとしても、神はその土の器の中に、何物にも代え難い宝であるご自身のひとり子イエス様を入れてくださった。主の御名を心からほめたたえましょう。